

32. 失語症患者の社会的活動の場を増やすことを目的とした小グループの実践

広島県立障害者リハビリテーションセンター

広島県高次脳機能センター

○林 ^{はやし}加^か容^よ，阿草 有香子，土肥 洋子，田中 聡美，丸石 正治

【はじめに】

多くの失語症患者は、言語機能が障害されたことにより、自分の思いを伝えたくても伝えられないもどかしさから、社会に出ていく機会や人と接する機会が減ってしまう傾向にある。今回、3人の失語症患者と個別に接する中で、他者とのコミュニケーションの機会を増やすことや社会に出ていくための情報を共有することを目的に小グループを結成した。その中での言語聴覚士の関わり方や3人の個々の変化、またこれからの課題などを報告する。尚、この実践は前任者から引き継いだもので、2人の言語聴覚士が連続して関わっている。

【目的】

- ・他者とのコミュニケーション機会の増加。
- ・サービスや制度などの情報の共有。
- ・各々の心理的負荷の軽減。
- ・社会的活動への参加。

【対象】

A氏 60代前半男性

診断名：脳梗塞（左側頭葉～頭頂葉），失語症
H19年，A病院にて心臓弁膜症の術後に脳梗塞発症。H20.1 当センターにて言語療法の外来リハビリ開始となる。

B氏 60代前半男性

診断名：脳梗塞（左中大脳動脈領域の出血性梗塞），失語症，視野障害，高次脳機能障害
H19年，脳梗塞発症。生活自立の目的で

H21.3 当センターにて作業療法・言語療法の外来リハビリ開始となる。

C氏 50代後半男性

診断名：脳梗塞（左側頭葉～頭頂葉），失語症
H21年，脳梗塞発症。復職支援の目的でH21.7 当センターにて作業療法・言語療法の外来リハビリ開始となる。

【方法】

小グループを行う際の形態。

- ① 時間 1コマ(40分)～2コマ(80分)
- ② 頻度 時間や曜日を特定せず，1/W～1/2M
- ③ 内容 設定したテーマについて(例：A氏による，サービスや友の会の情報提供)話す時や，フリートークの時など

【経過】

別々の時期に個別リハビリ開始となった際、各々から「自分は他者と比べて能力が低い」や「あまり人と接したくない」「でも仕事をしなければならない」などの発言がきかれた。個々の難しい点や目標などを考える中で、同年代の失語症で就労や生活自立などの問題を共有したり意見交換をしたりできればと思い、2人ずつの顔合わせから始め、H21年11月に初めて3人で小グループを行うこととなった。A氏に対しては、小人数のグループの中でリーダーシップをとること、B氏やC氏に対しては、人と接する機会を増やし、自信を取り戻すこと、という個別の狙いもあった。

グループの主な内容は、お互いの症状について困っていることや考えていることを話したり、A氏が当時参加していた失語症友の会の紹介したりなど。それから携帯電話のメール機能の活用練習を行い、ST 含めメール交換を行うようになる。徐々に、訓練場面やリハビリに関係した内容だけでなく、日常であった出来事などを電話やメールでやり取りするようになる。

H22年3月より、A氏は息子と一緒に働くことになる(～4月)。現在は週に6日、午前中のみ清掃の仕事に就いている。H22年7月より、B氏とC氏は職業訓練センターに通うことになる。個々に声をかけた時は、特にC氏は「自分には言語の問題があるから」と難色を示されていたが、B氏と一緒にならということで参加することに。言語の問題があるため、他の参加者と比べると指示の理解やパソコンの入力に難しさはあるが、お互いに声をかけ合い、一度も欠席することなく取り組んでいるようである。

A氏は主に電話で、B氏とC氏は主にメールで、連絡を取り合って近況報告をしているとのことである。

【まとめ】

現在、A氏は新規就労で週6日午前中のみの仕事をされている。B氏とC氏はともに週に4日、職業訓練センターへ通っている。3人で会う機会こそ少ないが、携帯電話のメール機能や電話でのやり取りはおこなっており、情報交換やお互いの近況報告などができているようである。

当センターへは、1～2か月に一度、仕事の様子や訓練センターでの様子の聴取などのために通院していただいている。

「自分は他者と比べて能力が低い」「あまり人と接したくない」「でも仕事をしなければならぬ」などのそれぞれの悩みを抱えていた3人が、小グループを通じて関わっていく中

で、社会での活動の場が広がり、携帯電話というツールを用いてのコミュニケーションが取れ、人と話すことを再び楽しむことができるようになった。小グループの場の提供という形で、きっかけを作ることができたのではないかと思う。

【今後の課題】

今後は携帯電話の他の機能も活用し、伝達手段を更に増やしていきたいと思う。また、B氏やC氏に関しては就労へ向けて、言語面をフォローできるようなサポート(機能面の向上、代償手段の獲得、心理面へのアプローチ)ができればと思う。

今回の報告は、3人の年代も近く、ニーズも共有できるものがあつたため、小グループが成功した例である。しかし、「共有できるものがあるから」といって、一概に成功するとは限らない。今回の経験を活かし、今後も失語症の方々の活動の場を広げるための一手段として、様々な要因を考慮しながら小グループの実践を進めていきたい。

【参考文献】

- 1) 鹿島晴雄, 大東祥孝, 種村純: よくわかる失語症セラピーと認知リハビリテーション, 永井書店, 2008; pp322